

音読

長く親しまれている古文の文章の言葉のひびきを味わいましょう

年
名前

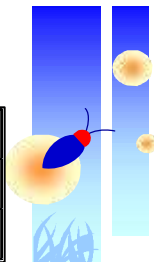
古文Ⅰ

枕草子

『枕草子』(まぐらのそうじ)は、清少納言によって書かれた平安時代の随筆(ずいひつ)です。随筆とは、筆のおもむくままに自由に見聞や感想、意見を書きつづる文です。

枕草子

清少納言



春はあけぼの。

はるはあけぼの。

やうやう白くなりゆく山ぎは、

すこしあ

む

くも

少し明かりて、紫だちたる雲の

ほそく

細くたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、

なつよめつき

闇もなほ、蛍のおほく飛びちがひたる。

やみ

なほ

ほたる

おほく

ちがひたる

また、ただ一つ二つなど、

ひと

ふた

ほのかにうち光りて行くもをかし。

ほのか

に

うち

光りて

行く

も

を

かし。

雨など降るもをかし。

あめ

など

ふる

も

を

かし。

(秋は夕暮れ…、冬はつとめて…と続く)

〔解説〕

春は、夜明けがよい。しだいに白んでいく山に接する空が、ほのかに明るくなって、紫がかつた雲が細くたなびいているのがよい。

夏は、夜。月が出ているときは言うまでもなくよい。やみ夜であっても、ほたるが多く飛びかっているのがよい。また、ほんの「一匹が、ほのかに光って飛んでいくのも風情がある。雨が降っても風情がある。

読んだ回数 (で囲む)	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	よく聞こえる	すらすらと読める	暗唱
私の評価 (. .)				
先生の評価 (. .)				

(とてもよい よい もう少し)